

第3回 全国小・中学生障がい福祉ふれあい作文コンクール 受賞作品 講評

本年で第3回を迎える本コンクールは、初回でありました一昨年からお寄せいただいた作文が大幅に増えていることに応募してくださった小・中学生の皆さんはもちろん、ご協力くださった学校関係者、保護者の皆様方等々に感謝を申し上げます。昨年の7月に社会全体を震撼させた神奈川県津久井やまゆり園での残虐な事件がありました。今回の応募作文の中にも、この事件から感じ、思ったことを綴られたものが数点ありました。どの作文も命の大切さを訴えた意義深いものであり、障がいのある人の福祉のことを真剣に考えていただけたことを嬉しく思います。このような事件が二度と起こらないよう、本会といたしましても、みんなが共に支えあい生きていく共生社会の実現を目指して本コンクールを含む啓発事業の推進に更に取り組んでいかなければと思いを強くしているところです。

各都道府県協会における選抜を経て本会へ推薦された作文の最終選考委員会が年明け早々に行われました。やはりどの作品も良く書かれており、甲乙つけがたく、私を含めた選考委員には本当に難しい判断が迫られました。そんな状況の中で決定した審査結果を報告いたします。

小学生部門で厚生労働大臣賞に選ばれた永瀬圭志朗さん（福島県・須賀川市立西袋第一小学校6年）の作品『心の中で』は、母子の話のやりとりから心がほんわか温かくなり、心の声にきちんと耳を傾けてあげられる人になりたい、障がい者という言葉が好きではない、障がいという言葉を使わずにみんな同じように関わってほしい、そんな社会になってほしいとのメッセージは、共に思う願いです。ありがとう。

同じく小学生部門で文部科学大臣賞に選ばれた高橋京加さん（長崎県・大村市立三浦小学校5年）の作品『差別のない世の中へ』は、作者が生まれた時、重い障がいのある姉がいて、日々共に暮らすことが当たり前の生活、特別支援学校卒業後、デイサービスに通う姉は歩行困難、言葉もなく、食事も介助の中、作者は時々「お姉ちゃんは何を思っているのだろう」と思う時もあると綴られています。姉は私たちに様々な表情で思いを伝えようとしてくれている」と、多感な少女期の優しい気持ちが伝わってきます。自分の気持ちをうまく伝えられない人たちに対する差別について考える今回の作文コンクールになったのではないかと思います。

中学生部門で厚生労働大臣賞に選ばれた三浦剛さん（宮城県・栗原市立築館中学校3年）の作品『兄から学んだこと』は、障がいのある兄を避けたり、障がいのあることを疎ましく思っていたが、兄の通う支援学校へ行ったことがきっかけで考えが一変し、偏見に気付き、支えていくことを決心する過程が丁寧に書かれており、両親の言葉の重み、けなげな兄の行動が共感を誘い、読んだ後に温かい気持ちになる作品です。

同じく中学生部門で文部科学大臣賞に選ばれた中野みちるさん（佐賀県・私立佐賀清和中

学校 2 年) の作品『心友』は、病後の後遺症でほとんど言葉が出ない方に幼少の時に出会い、言葉はなくても、人は心と心で理解し合えるということを教えてくれた大切な心の友との交流の様子が描かれた心が安らぐ作品でした。

会長賞に選ばれた小学生部門 2 作品、中学生部門 2 作品や、今回も優劣つけ難く審査員特別賞として選ばれた中学生部門 1 作品を含め、どの作文からも子ども達が障がい児(者)とふれあうことで、障がいのある人や福祉ということを理解して感動と学びを体験し、素直な思いや考えが綴られていると、選考委員一同より高く評価されました。

また、本年より、作品応募に積極的にご協力いただいた学校に対して、「学校賞」を贈らせていただくことになりました。心より感謝申し上げますとともに、改めて本コンクールにご協力いただいた皆様に御礼を申し上げ、審査報告といたします。

選考委員代表

橘 文也

【平成 28 年度選考委員会 委員名簿】

団体名 (お役職)		氏 名	備 考
後援団体	文部科学省 初等中等教育局 (視学官)	矢幅 清司	
	厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 (課長補佐)	菅 洋一郎	
	社会福祉法人 全国社会福祉協議会 高年・障害福祉部 (部長)	佐川 英雄	
	一般財団法人 児童健全育成推進財団 (理事長)	鈴木 一光	
	全国特別支援学級設置学校長協会 (会計部長)	須田 淳一	東京都板橋区立赤塚第三中学校 (校長)
	全日本特別支援教育研究連盟 (常任理事)	米田 正美	川崎市立長沢小学校 (校長)
学識経験者	ルーテル学院大学 総合人間学部 (教授)	西原 雄次郎	
	岡山大学大学院 法務研究科 (教授)	西田 和弘	
	公益財団法人 日本知的障害者福祉協会 (会長)	橘 文也	